

第二章 業の意義 (二)

霊界の業といえは世間一般に深山幽谷に入つて入つて、出世間的難行苦行をなす(の)こととのみ考へておる人が多いようである。跣足や裸(裸体)になつて、山神の社に立籠り断食をなし、断湯を守り(なし)、火食をやめて、神仏に祈願を凝らし、妙な動作や(を為し)、(異行)異行(を)敢てすることをもつて、徹底的修行が(を)完了したように思い誇る人々が多い(のである)。

すべて業は行である以上は、顯幽一致 身魂一本の真理により、顯界において可及的(大活動)をなし、もつて天地の経綸に奉仕するのが第一の行である。たとえ一ヶ月でも人界の事業を廃して山林に隱遁し怪行異業(怪行異業)に熱中するは、すなわち一ヶ月間の社会の損害であつて、いわゆる神界の怠業者もしくは(亦は)罷業者である。すべて神界の業といふものは現界において生成化育、進取発展の事業につくすをもつて第一の要件とせなくては(ねば)ならぬ。

(今日(の)大本の一部の人士のごとく)或る一部の人士の様に、何事も『惟神かむながら』(惟神々々)といつて難(難)を避け、易きに就かむとするは神界より御覽になれば(ると)、実に不都合不届至極の人間といわれてもしかたはない(奴と曰わねばならぬ)のである

業……業は行だということ、つまり深山幽谷に入つて難行苦行をすることではなく、社会生活を立派に成し遂げて行くことだということ。

顯幽一致、心魂一本の真理……靈体一致といふも同じで、それが眞実の天の理だとの教え。

顯界……現実社会のこと。

可及的大活動……差し迫つた事態に対し

る。少しも責任觀念というものが無いのみか、尽すべき道をつくさずして、かえつて神業の妨害ばかりしながら、いつも神界にたいし奉り、却つて神界へ対して不足ばかりいつてい（お）る。これがいわゆる黄泉醜人（大本内部の黄泉醜女）である。神諭に、『綾部の大本へは（世界の落武者が出て来るから用心なされよ）をせよ』

ということが示されるを考へてみるがよい（示されてある）。神界の業というものは、そんな軽々しき容易なものではない。しかるに自分から（王仁が前に述べた様に）山林に分入りて修行することを非難（批難）しておきながら、かんじんの御本尊は一週間も高熊山で業（行）をしたのは、自家撞着もはなはだしいではないか……との反問も出るのであるが、しかし自分（王仁）はそれまでに二十七年間の俗界での悲痛な修行を遂行した。その卒業式ともいふべきものであつて、生存中ただ一回のみ空前絶後の実修であつたのである。

世には…… 釈迦でさえ檀特山において数ヶ年間の難行苦行をやつて、仏教を開いたではないか、それに僅が一週間ぐらいの業で、三世を達観することを得るようになったとは、あまりの大言ではあるまいか……と、疑問を抱く人々もあるであろうが、釈迦は印度国浄飯王の太子と生れて、社会の荒き風波（風波）に遇つたことのない坊ンさんであつたから、数年間の種々の苦難を味わつたのである。自分（王仁）はこれに反し幼少より極貧の家庭に生れて、社会のあらゆる辛酸を嘗めつくしてきたために、高熊山に登るまでに

大いに活躍すること。

黄泉醜女……地獄的想念を持った悪い人間。

顕界けんがいの修行しゆぎょうを了おえ、また幾分いくぶんかは幽界ゆうがいの消息しよつそくにも通つうじておったからである。(それ故ゆえ僅わずか
一週いっしゅう間位かんくらいで修行しゆぎょうの功こうを顕あわしたのである。)

瑞月

神業をなすのが原の若草は

踏まれにじられ乍ら花咲く

世を救ふ神の稜威もたかくまの

露に潤ふ百の人々

ありがたき御代にあふぎの末広く

開け行く世をまちつゝぞふる

三世を達観……現・幽・神の三界全体を
観察し、真理・道理をみきわめること。す
ぐれた眼力をもつこと。